

「信仰による義・行いによる義」

ローマの信徒への手紙9章

9:30 では、どういうことになるのか。

義を求めなかった異邦人が、義、しかも信仰による義を得ました。

9:31 しかし、イスラエルは義の律法を追い求めていたのに、その律法に達しませんでした。

9:32 なぜですか。イスラエルは、信仰によってではなく、行いによって達せられるかのように、考えたからです。

彼らはつまずきの石につまずいたのです。

9:33 「見よ、わたしはシオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。これを信じる者は、失望することがない」と書いてあるとおりです。

1) 義を求めなかった異邦人と義の律法を求めたイスラエル

イスラエルの人たちには「律法」がありました。律法とは、神が何を喜ばれるのかを示す道標であり、それを実行しながら歩む時、神からの賞賛を得るとイスラエルの人たちは考えていました。しかも、それは人間の努力と頑張りで達成可能だと考えていたのです。

しかも、律法が自分を助け、律法や規範が自分たちを救ってくれると考えていたのです。

しかし、実際は正しいと思うことをやってもやっても、そこに神の平安は訪れませんでした。

むしろ、それらを知らない他者を軽蔑してしまう自分に気付かされたのです。また、自分が品性においても、行動においてもどれほど神の基準から離れているかを思い知らされることになったのです。

律法は正しいものなのですが、それを知れば知る

ほど、自らの足りなさが明らかにされ、なんとなくそれだけでは居心地が悪くなっていくのです。

それに引き換え、異邦人たちはそれぞれの文化の中で似たようなものはあるとはいえ、律法などほとんど知らない生活ですから、イスラエルの人たちの見方によれば、とんでもなく神の基準から遠い生活でした。

しかし、そんな罪にまみれた彼らを一方的な、しかも無償の愛で救うためにやってきたイエス・キリストがやってきてくださったことを聞き、彼らは喜んで歓迎し、その心に「赦しの恵みを受け取り」救いを味わうことになりました。

もともと、律法を守ることで救いを得ると考えていたイスラエルの人たちにとっては驚きだったと思います。その部分をほとんどバイパスして自らの罪に気づいた異邦人は「赦しをもたらす主イエスの十字架による身代わりの死」を信頼し救いを得たのです。

イスラエルの人たちにとっては「律法もイエス様も」つまずきの素材になりました。

「救うための律法」も「救うための十字架の死」もイスラエルの人たちには「つまずき」となり、受け止めることはできませんでした。

頑張ったら救われると思っていたのに、そのようにはならないし、もしイエスが救い主ならあの恥さらしの十字架になどかけられるはずはないということなのです。

もったいない話です。

行いではなく、信頼することで神の義を得るというのですから。

つまり、がんばって、がんばって幸せを得るということではないのです。

2) 頑張るって得る幸せ（救い）ではない

「マインドフルネス」を世界に広めることになったテクナット・ハンという仏教指導者は「「幸せに至る道はありません。幸せこそが道なのです」という言葉をかたりました。

私たちはがんばって、がんばって、がんばって幸せになるのだという発想を持ちやすいのですが、実は、そうではなく「今、ここに生かされていること自体が幸せなのだ」という立ち位置に気づくことこそ重要なのでしょね。「生かされている幸せを土台に生きる」それは赤ちゃんがお母さんに抱っこされて安心して眠って大きくなっていくのと似ているようにも思います。

ヨハネによる福音書には

14:6 イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。

14:7 あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」

と語りました。

頑張っって幸せになるのではなく、その道に立てることこそ幸せなのです。イエス・キリストという「道」に立ってられるなら、あるいは「道」そのものであるイエス様につながっているなら、幸せはそこにあるのです。

その本質は「信仰」「繋がり」「信頼」です。

行いや頑張りではありませんでした。

それはまさに異邦人が得た「義」のあり方そのものです。

礼拝映像はこちらです。

<https://youtu.be/PDC0aWOHzdc>